緑土会の歴史と共に歩まれた中部恭二さんのご逝去を悼む

東京都市大学名誉教授　皆川　勝

大先輩ですが、敢えて中部さんとお呼びします。私は昭和 50 年に武蔵工大に入学しましたが、それ以前から、すでにあなたは緑土会で大きな存在感を示されていたようです。以来、あなたの人生は、武蔵工大および緑土会とともに歩まれた人生であったと、私には思えます。戦後から昭和 30 年代に卒業された田辺先生、神山先生、小玉先生並びに成山先生は、戦後の学生急減の困難な時期を乗り越え、そして、緑土会の活動の活性化のために、名簿を整備し、卒業生からの終身会費などを原資として財政の健全化に務められ、今日ある会の基盤を固められましたが、まさに同じ時期に大学を卒業されて、コンサルタント勤務を経て起業されると共に、緑土会並びに武蔵工業会の活動に参画され、中心的な役割を担われてきました。

若かりし頃の中部さん。故成山元一先生とともに
（緑土会総会にて、1975 年頃）

（土木系学科専任教員になられた緑土会会員）

お名前	卒業年	在職時期
田辺幸男先生	昭和 24 年	昭和 31 年から昭和 62 年
神山光男先生	昭和 28 年	昭和 30 年から平成 11 年
小玉克己先生	昭和 31 年	昭和 31 年から平成 15 年
成山元一先生	昭和 33 年	昭和 34 年から昭和 63 年
片田敏行先生	昭和 50 年	昭和 56 年から平成 27 年
皆川　勝	昭和 54 年	昭和 56 年から令和 3 年
丸山　收先生	昭和 58 年	昭和 63 年から現職
伊藤和也先生	平成 10 年	平成 27 年から現職

昭和 48 年度からは、卒業後 10 年ほどの 30 代前半にもかかわらず、大政正二郎第 2 代会長（昭和 13 年卒）のもとで会の監事を務められました。大政会長、小林博副会長（昭和 20 年卒）を除けば唯一の学外者役員でした。会長・副会長や先生方からいかに信頼されていたかを示すものと思います。また、「48 年当時は、緑土会会員も 1,500 名足らずで、基金は 82 万円余でした。何をするにも資金が必要で、田辺総務部長と『早く基金を 100 万円以上にしよう』と、金利の良い郵便局へ貯金したり、幹事会や諸打ち合わせ会に出席する皆様より 1,000 円を徴収して、緑土会の基金を増やす努力をした」（緑土会七十年の歩み「緑土」より）と大政氏が言われた時期に会の監事を務められ、実務者としての知見を踏まえて会の監理に尽力されました。それらの努力の成果として、昭和 52 年度から土木工学科卒業生で成績優秀者に緑土会賞を授与することも始まりました。小生も、昭和 54 年に卒業する際に緑土会賞をいただきましたが、そのような先輩方のご尽力の賜物であることを知ったのは、ずっと後のことでした。

小林康一第4代会長（昭和22年卒）は、平成9年度に会長を中部さんに引き継ぐにあたって、「企業経営者としての能力は群を抜き、工業会常務理事でもあり、また若手に人気があって将来工業会会長に推薦できる人物」（緑土会七十年の歩み「緑土」より）とあなたを評されていました。当時の多くの関係者の一致する見方であったと思います。

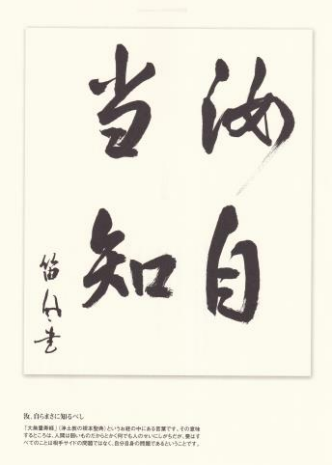
あなたが緑土会会長を務められた時期、わたしは緑土会総務部長としてご指導をいただきました。個人的にも多くの思い出があります。判断に迷ったとき、困ったときには、いつも、近くにあなたがいらっしゃいました。思い出は尽きることがありませんが、ここでは特に、緑土会運営のあり方についてのあなたの一貫した考え方、緑土会70周年記念誌及び記念名簿の発刊を発案された思い、および大学75周年募金活動での実績について、皆さんに改めて紹介させていただきます。

あなたは、「緑土会の活動は、母校の現役の先生方の負担がなるべく少なく、教育研究の推進を助け、間違っても教育研究の時間が削られることがないよう注意しなければならない。特に学外の緑土会会員は注意をして事に当たるべきである」と常々述べられておりました。卒業生の教員にとって大変温かいお考えと、常に感謝をしておりました。そして、同窓会のもっとも大きな意義は、大学への金銭的な貢献にあり、会員間の親睦もそのような貢献を継続的に行ってゆくために重要であるというお考えであったと私は理解してきました。日ごろの親睦やコミュニケーションが十分に行われていない組織では、学科や大学への貢献はできないというお考えではなかったかと思います。

順位	卒業年	募金額
第1位	昭和37(1962)年	2,190,000円
第2位	昭和40(1965)年	1,680,000円
第3位	昭和36(1961)年	743,000円
第4位	昭和35(1960)年	665,000円
第5位	昭和34(1959)年	580,000円

（以下、紙面の都合により省略）

緑土会は大学創設の翌年にあたる昭和 5 年（1930 年）の発会であり、あなたが会長であった平成 12 年（2000 年）に 70 周年を迎えていました。あなたは、これを機に、記念誌及び記念名簿を発行することを提案され、実施に移されました。当時は、個人情報保護の観点から同窓会名簿の発行が難しくなる時代で、これが最期の機会であるとの考えから名簿を発行して会員間の交流の基盤にしようとのお考えでしたね。また、記念誌につきましても、私の知る限り緑土会としての発行は初めてのことでした。表紙の題字、ならびに「汝、自らまさに知るべし」は、木村充男氏（土木昭和 49 年卒）をご子息に、木村真理氏（環境情報学科 2 年在学、当時）を孫にもたれる木村笛風氏の揮毫でした。「汝、自らまさに知るべし」とは、「人間は弱いものだからとかく何でも人のせいにしがちだが、要はすべてのことは相手サイドの問題ではなく、自分自身の問題である」という浄土教の言葉であり、まさに率先垂範の言葉通り、自分自身の問題として行動した会長を表わす言葉でしたね。



緑土会七十年の歩み「緑土」
（2001 年 3 月発刊）

母校創立 75 周年記念募金の緑土会各年度の募金

平成 16 年（2004 年）には、母校が創立 75 周年を迎え、その記念募金で緑土会は武蔵工業会（当時、現校友会）より 1,400 万円の募金の割り当てがあり、『率先垂範』を合言葉に他学科の OB 会に先駆けて、早々に緑土会としての目標金額を達成しました。緑土会各学年別の募金額の順位は表の通りでした。あなたの代である昭和 37 年卒の皆様には、昭和 40 年卒の『緑土 40 年会』の皆様と双璧と言える見事な貢献をされました。

あなたは、昭和 60 年当時の緑土会前会長であった大政正二郎氏の武蔵工業会理事長就任、そして、あなたの次の緑土会会長であった松下正勝氏の初代校友会会長就任に対しても大きなご尽力をされ、この時期の OB 会全体の運営を支えられましたね。私自身は、いつになったら武蔵工業会の会長をあなたご自身がお引き受けになるのだろうと思いつづけておりました。ですが、ご自分は表に出ることを良しとせず、武蔵工業会とそれから引き継がれた校友会の今の発展に対して、直接間接に大きな貢献をされたのだと思います。松下氏の後に会長になられた草柳俊二先生（昭和 42 年卒、東京都市大学特別教授）が、当時大学院工学研究科長であった小生並びに丸山收教授（緑土会総務部長、昭和 58 年卒）などの教員団をご指導いただき、都市大の大学院プログラム「社会基盤マネジメント」の創設とその後の順調な運営に多大な貢献をされています。さらには、社会人大学院生としてその「教え子」となった松浦弦三郎氏が、緑土会会長を引き継がれて今日に至っています。まさに、あなたの精神が引き継がれ、大学の隆盛につながっていると思えます。

（緑土会歴代会長）

代	お名前	卒業年	在任期間
第 1 代	今川　衛氏	昭和 7(1932)年	昭和 41(1966)年度から昭和 47(1972)年度
第 2 代	大政正二郎氏	昭和 13(1938)年	昭和 48(1973)年度から昭和 60(1985)年度
第 3 代	小林　博氏	昭和 20(1945)年	昭和 61(1986)年度から平成 4(1992)年度
第 4 代	小林康一氏	昭和 22(1947)年	平成 5(1993)年度から平成 8(1996)年度
第 5 代	中部恭二氏	昭和 37(1962)年	平成 9 年(1997)度から平成 17(2005)年度

第６代	松下正勝氏	昭和 40(1965)年	平成 18(2006)年度から平成 23(2011)年度
第７代	草柳俊二氏	昭和 42(1967)年	平成 24(2012)年度から平成 29(2017)年度
第８代	皆川　勝	昭和 54(1979)年	平成 30(2018)年度から令和 2(2020)年度
第９代	松浦弦三郎氏	昭和 51(1976)年	令和 3 年(2021)から現在に至る

緑土会、武蔵工業会、武蔵工大と共に歩まれたあなたの足跡を辿るとき、もう同じような大きな貢献をなされる方は出てこないのではないかと思われて仕方ありません。ですが、もしあなたにそのように言えば、「いやいや、緑土会の伝統と精神は引き継がれているんだから、今の皆さんの活躍に不安はありませんよ」と、笑ってくださるようにも思います。今も、緑土会の皆さんは、ここで私がご紹介させていただいた中部さんとはちがう形で、それぞれの時間と、それぞれの場所で、それぞれの立場で、ご自分の人生を形成しながら、緑土会の発展と若い卒業生の活躍に力を貸していただいていることに、あらためて感謝せずにはおられませんね。次にお会いするまで、しばらくの間、ゆっくりと休んでください。

会長当時の中部さん。
故神山光男先生ら当時の緑土会幹部と
(2006 年頃)

令和 4（2022）年 2 月記す。合掌